

● 地域連携・道徳 ●

# 「非認知能力」の育成に焦点をあてた コミュニティースクールのモデルづくり ～学校・家庭・地域の「三本の竹」事業で子どもたちの「学び力」を育てる～

奈良県 御所市立大正中学校（校長 向本博俊）

- ①「学ぶ授業」を創るための授業づくりの工夫
- ②「非認知能力」の育成を目指した、心を耕す道徳の授業の創造
- ③ 家庭・地域との協働により子どもたちの「学び力」を育てる取組の提案

## 【はじめに】

本校は、奈良県の西部にある全校生徒115名の小規模校である。

大正中学校は、「自己および自己をとりまく世界を読み解き、それをより良い方向に変革していこうとする意欲と実践力の育成（本校教育目標）」に向け、2018年度より“大正「学び力」育成委員会（学校運営協議会）”を設置し、その翌年より家庭と地域、学校が協働するコミュニティースクール（C.S）をスタートさせた。

## I 研究主題の設定

現在「子どもの貧困」が深刻な問題となっている。長い歴史を通して困難な状況の中に置かれてきた地域を校区にもつ本校も他

人事ではない。様々な教育課題の克服に向け、教師たちの志ある教育実践が営々と続けられてきた伝統は、今も次世代の教師たちに引き継がれている。

ここ最近、学力育成にかかわって「非認知能力」という概念が注目されるようになってきている。コミュニケーション力や共感力、忍耐力、自尊感情、意欲など、テストで点数化、数値化しにくい力のことである。

学力にかかわる課題は、本校区の厳しい生活実態の反映であり、今なお克服には至っていない。一方では、厳しい実態ゆえの「人のぬくもり・たすけあい」という地域の生活文化が歴史的に醸成され、今もそれは子どもたちの気質に引き継がれている。これまで私たちは取組を通じて、地域とそこに育つ子どもたちの温かさや仲間意識の強さを日々感じてきたが、今これ

を、非認知能力育成にかかわる、他所にはない貴重な土壌、財産、チャンスと捉え直すことにした。そして、課題克服に向けた本校の方策を、そのような地域の財産を束ねる協働によって、子どもたちの非認知能力を高めることを通してテストの点数など「見える学力」を含む『総合的な学力(=「学び力」)』を育てる道を選択した。

そこで2019年度からコミュニティースクールの認定を受け“大正「学び力」育成委員会”を軸とした標記「三本の竹」事業を推進している。今後は取組を一層加速させ、かつ整理し、「しんどい」と言われる学校における学力向上の一つのモデルを示したいと考えている。

## II 研究の概要

### 1. 授業づくりの変革と道徳

#### (1) 授業づくり委員会

週1回の定例委員会を設け、各教科担当から出された意見を集約し、授業づくりのための議論を行う柱としていった。

#### 議案①：(座席の) 班形式・列形式形式のちがいは、授業にどう影響するか

そもそも生活班は、授業で機能することを主眼に取り入れられたものである。その目的は“取りこぼし”のない授業。「しんどい」子どもも授業に参加し、ともに学ぶ環境を形にしたものが本校の生活班である。



その目的が達せられるならば、座席がテスト形式でも問題はない。

※当然ながら、班形式の「隣り合い、向かい合う」という物理的な形体は、その目的を達成するためにある。その視点にお

いては、テスト形式が班形式より物理的形体として劣ることはない。



結論として…

ア：授業者が、“取りこぼし”のない授業をしっかりと意識して行う。

イ：班の子と学び合う上で、自由に立ち歩いて教え合うことをよしとする。

ウ：臨機応変に、さまざまな形を採用する。

①大正中が大切にしてきた班形式。

②一人一人に聴かせ、一人一人に思考させる点を重視した列形式。

③スタンディング・ミーティングにより、適度なディスタンスを保ちつつ、グループ学習を行う形式(ラムズフェルド形式)。

※(ラムズフェルド形式)…スタンディングミーティングを好んで活用した国務長官の名を冠した。



◆教員による議論の様子

#### 議案②：ざわつく授業・口々発言が多くなる状況をどう改善するか

(例) 授業者から指示A「その箇所を読んでください。」

生徒たちが口々に「読んでー。」

「どこ?」「読むだけ?」

「これ習ったやつやん。」

「え、習ってへんで。」「わからん。」

…私語が繰り返される

…ざわつく



指示Aの目的は何だったのだろうか？どんな方法で読むのか。黙読させるのか、音読させるのか。個々へ・班へ、いずれに対しての指示なのか。読ませた後、次の展開に、どうつなげようというのか。それぞれ下線部の点であいまいである。



生徒たちは、初めから指示を重んじていない。「何のためにするのか。」「それって大事なん？」あいまいな指示は、授業の方向性もあいまいとなり、軽んじられる。そして生徒たちは、口々に思ったことを発言していく…指示Aに納得出来ないまま、授業が進みつつあることに抗議する生徒たちの気持ちは、正当であるといえる。ゆえに授業者が「静かに！」とたしなめても、反発が返るのみである。



指示B「個々に、その箇所を黙読してみてください。黙読した人から静かに起立してください。」…「立ってない人いるな。班の人、どこ読むのか教えて。」…「みんな読んだね。じゃ、この箇所に書いてあることを、前に習ったって思い出した人は静かに座ってください。」…「あー。6人が、思い出せないんだな。」指示Bの目的は、

- ア. 一人一人の授業参加を促すこと。
- イ. 次の理解につなげるパーツの理解度の割合を確かめること。
- ウ. 他者の理解度や態度に関心を持たせること。
- エ. 授業参加の一体感を生み出すこと。

「わかる人もわからない人も、みんな授業に参加している」という一体感がある。そして指示Bは、具体的に個々が取り組むべきことをはっきりさせている。また、明らかに授業者が次の展開に移ろうとしている中で「大事な確認」を行っていることは生徒も感じ取れる。



結論として…

指示を明確化すること。指示の目的や方法などを具体的に表す。生徒が指示にスムーズに従えば、授業の展開もスムーズにつながる。

議案③：授業づくりと認知能力・非認知能力

認知能力・非認知能力の観点から授業づくりを考えてみた。「非認知能力が向上すれば、認知能力も向上する。」という、とらえ方もある一方で、「数学などの教科では先ず、認知能力（基礎・基本的な学力）を高めていかないと、非認知能力は高まらないし、やる気や意欲・関心も高まらない。」とする意見もあった。そうして初めに認知能力を高めつつ、非認知能力をも高める素地が出来ていく、ととらえている。

大正中学校の生活班は、非認知能力を高める取組でもある。議案③については、今後も気にかけて授業づくりを行っていくということで議論を終えた。



結論として…

今後も認知能力・非認知能力を意識して授業づくりを行う。※RHP（レイジングハンドプログラム）を活用することで、非認知能力を意識した授業づくりが出来る点も指摘された。

## 大正中学校での授業について

「学ぶ」とは、「自分や、自分を取り巻く社会や世界を読み解くこと」です。

私たちは、日々様々な人や物事、そして出来事と関わりながら生きていますよね。その中でも一番近い存在としての家族や友だちから、目を遠くに向けてみるとそこにある地域や社会、そしてさらにその先の世界・・・実に壮大な「人・物・事」が私たちの周りには広がっています。

自分のこと    周りのこと    社会のこと    世界のこと

私たちが生きる世界は、とても複雑です。特に私たちが、これから生きていくことになる未来は、より複雑で変化の激しいものになるでしょう。見通し不透明で複雑な、これからの世界の中で生きていくためには、「この世界がどのように成り立っているのか」また「その中に生きている自分自身は何者なのか」さらに「それらの世界は、自分とどのように関わり、自分はどうやって生きていくべきなのか」などについて知り、分る必要があります。そのためには、すべての作業を大正中では「読み解く」という言葉で表したいと思います。

私たちは毎日学校へ来て、その多くの時間を「授業」という学習空間の中で過ごしていますね。授業で学習する目的は何が伏してテストで100点をとって、レベルの高いと言われている高校へ入るためではありません。それは目的ではなく、学習の結果としてあるものです。授業で学習する究極の目的、それは今言った「読み解く力」をつちかうことです。読み解いた上で、世界の中で生きていく実用的な力をつちかうこともその中に含まれます。

「学ぶ」＝「自分や自分を取り巻く社会や世界を読み解くこと」とらえ、みんなで学びあえる授業を教師と生徒が手を取り合って創り上げていきましょう。

全員で「学ぶ」授業を創るために、必ず全員で行うこと。

それが・・・

## Raising Hand Program (RHP)

<Raising Hand=手をあげる Program=授業>

- 1 「分からへん」「教えてよ」と訊きあえる授業
- 2 「なんでなんやろなあ?」「これどう思う?」と聴きあえる授業
- 3 訊き合い、聴き合い、分りあえる授業

ある子にとっては「分かる」問題でも、その隣で「分からへん」「教えてよ」と訊けずに悩んだり苦しんでいる子がいます。「分からへんって言うことは、恥ずかしい」「教えてよとか言われへんし。」「どうせ俺なんて、私なんて。」と、学ぶことをあきらめている子が隣にいるかもしれません。一人ひとりが安心して、「分からへん」「教えてよ」と訊きあえる授業だったら、どんなにやりがいが出るでしょう。全員がいつでも「ここは分かってるよ」「ここは分からへんねん」と意思表示をするために「Raising Hand」!

「試験に出るから確認しとこ。」ではなく、「なんでなんやろなあ?」と疑問がわき出てきたら、自分で答えを探したくなります。人の考えをききたくなります。「それはこうじゃないかなあ?」と、互いの意見を聴き合いながら一緒に考え、「ああ、そうか、なるほど!」と納得できた時が、本当の「分かった」時。そんな「私はこう思う」と意思表示するために「Raising Hand」!

「訊き合い、聴き合い、分り合う」そんな授業を創っていけば、もっと授業は楽しくなるはず。少なくとも「あー、めんどくさいなあ。早くこの時間終わらへんかなあ・・・。」と思う時間は減るはず。

文字どおり「みんなの手」で、学びあいの授業を創っていくよう!

## (2) WAYプロジェクト

本校では道徳の時間に「生き方」の授業を展開し、人間らしい生き方について考える時間としている。この「生き方」科の授業をもっと充実したものにしていこうという議論になり、その第一歩として教員によるプロジェクトチームを立ち上げた。

一般的にいうと「道徳教育推進委員会」であるが、ネーミングにこだわろうということで、様々な検討を加え「WAYプロジェクト」という名称になった。WAYは「道」という意味である。もちろん「道徳」からとったのであるが、わかりやすくいうと自分の生きる「道」や生き方を考える際の、きっちりとした「道すじ」を描いていく力を培うためにはどのような取組がよいのかを考えるためにつくったチームである。木曜日の19時から21時の時間において開催し、校内プロジェクトメンバーの教員にとどまらず、他校の教員や学校運営協議会

員、PTA、市P顧問、地域の子どもも指導ボランティア、高校の先生など、幅広い方に参加していただき進めている。また、助言者として土屋貴志先生（大阪市立大学准教授<倫理学・哲学>）に毎回参加していただいた。



◆ WAYプロジェクトの様子

## (3) みんなの授業研（年6回実施）

各学年、各教科における「授業規律」（「自然や社会、人や文化などさまざまな対象とのかかわり」の機会をみんなが享受できる

ための共通の行動基準)の策定とその日常的な追求を目指してきた。「授業づくり委員会」を定例委員会として設け、「“学ぶ”とは何か。」という課題に、教員自身が頭を悩まし、また熟考し、授業の展開を考えていった。ここで練り上げられた指導案をもとに行ってきた授業研修会に、学校運営協議会(本校では「学び力育成委員会」と呼ぶ)の委員の方にも参加していただき、ともに子どもの「学び」の質の向上させるための協議を行った。

このように「みんなの授業研」という位置づけで校内授業づくり委員会と連携することで、若い教員の授業づくりを励まし、鍛えてきた。「学び力育成委員会」の方はもちろん、保護者や地域の方も交え、子ども目線・「素人」目線を大切にしながら「わかる授業」を追求している。

### 授業研①

#### 【哲学対話を取り入れた道徳の授業を考える】

「自分や自分に関わるいろんな事を『それって何?』と対話しながら振り返る学習にしてほしい。」そんな願いのもと、「哲学対話」を取り入れた授業展開を考えることになった。「哲学対話」の導入にあたり、株式会社イミカの原田博一さんを本校に講師としてお迎えし、授業を行って頂いた。まずは、VTS (Visual Thinking Strategy) というアメリカで開発された美術鑑賞法を用いた授業であった。同じものを見た人同士でそれを共有し、対話しながらより多面的・多角的にものごとをとらえ、深めていく。道徳でいわれる「多面的・多角的にものごとをとらえる」ためには、他者との対話が必要であるということがわかった。対話の持つ意味や必要性を実感することができた。本校では生徒第一声、集中 HR など

を通して、「自分のことを語る」取組を続けてきた。自己開示(※)を様々な取組を通して追究している本校では、さほど抵抗なくこの授業に生徒一人一人が向かえた。この土壌があることで、自分の思っていることや考えていることを表現できる、自分の言葉は否定されないという空間が生まれ、VTSでも積極的に自分の意見を述べることができたのではないかと分析できる。非常に中身のある時間になったとともに、参加者がともに学び合う空間ができた。

※自己開示・・・大正中では第一声や集中HRで「自分を語る」。自分の生い立ちや自分の抱えているしんどいことをクラスのなかまに語る。自分自身のことを知り、自分自身の存在意義を考えると同時に、しんどさや生き方を共有することで、ともに立ち向かおうとする集団へとつなげている。



◆哲学対話の授業

また、次時では、授業を通して「人にはそれぞれ考え方のクセがある」ということを学んだ。そのクセをコミュニケーションにより見抜き、どう違うのかを探ることで、人と人とのつながりや関係性をより深いものができることを実感した。人の

クセというものは見た目だけでわかるものではなく、会話つまりコミュニケーションをすることで相手がどのような考え方をしているのかがわかるのだという。しかしコミュニケーションと一言で言ってもどのようなことをさすのか。原田さんは「コミュニケーションとは考えや気持ちを相手に伝えて共通点をつくること。人が‘人間’として生きるうえでとても大切な力です。」と説明された。では、一体コミュニケーションが‘人間’として生きるうえでとても大切な力とはどのような意味なのか。生徒の思考を促す問いがちりばめられていた。

## 授業研②

### 【学校長による道徳の公開授業研】

〈問題意識・目的〉

「大正中道徳教育全体計画」を作成し、その真ん中にある「道徳の授業」を6月の学校再開から学校長がリーダーシップをとり実施してきた。その中で、授業研に至る問題意識が示された。

★「価値項目 22」についての昨年度 WAY プロジェクトでの論議を実際の授業でどう活かすか？

☆以下の学習活動を全 35 時間の中でどう配分するか？

- ①生徒たちの日常の葛藤経験を教材化し、自分自身に身を置いて考える活動
- ②教科書を使用し、登場人物の気持ちに身を置いて考える活動
- ③抽象的な概念それ自体についてそもそもそれは何かを考える活動  
(例えば「家族愛とは何か?」「自律するとはどういうことか?」などについての哲学対話)

今回の授業研は、大きな問題意識としての★と、具体的な問題意識としての☆の中での①について今後の授業の「形」を提案する目的で実施した。

★についてであるが、昨年一年間を通じて地道にかつ精力的に土屋先生を迎え、地域や保護者の方と協働して行ってきた WAY プロジェクトにおける論議の中から見えてきた「価値」にかかわる「本校の子どもの具体的な姿」>をどう授業に反映させるか、道徳を「押し付け」にしないことは学習指導要領解説編にも何度も記されている。つまり道徳を「建前」で終わらせず「生活者としての子どもの日常」とどう結びつけるのか、という大きなミッションである。その端緒として☆①を行っているということである。

☆①を通じて培いたいのは次の力である。「道徳的判断力の育成＝道徳的判断の際の根拠を、安易な理由に求めるのではなく、多角的多面的な視点で様々なことを考えた上で、自分としての最善の選択として理由づける力」。そのために☆①では、子どもの声からジレンマストーリーを作成し、自分ならどうするかを葛藤を追体験し、なぜそうしようとするのかについての理由を集団の対話によって交流しながら判断を吟味していく学習を行っていく。

この学習が道徳的判断力の育成につながるかどうか、つまりこの学習が成立するかどうかは、ジレンマをめぐって子どもがしっかり「知る」「聴く」「語る」「思考する」ことをし、その結果としての「対話する」が実現しているかどうかにかかっている。それは成立していたのか？していなかったのか？またそれはなぜなのか？について検証し、今後の実践に活かすのが、今回の授業公開における授業者の目的である。



◆道徳の授業の様子



◆研究協議の様子

## 2. 地域との協働による生徒の育成

### (1) 放課後学習支援活動（名称「With Us」）

生徒の進路学力保障に向けた基礎学力の向上、自尊感情や自己肯定感の育成、規範意識の高揚、コミュニケーションづくりを中心に、地域ボランティアの方々の協力のもと、月曜日の放課後の部活動を取りやめ、学習活動に取り組んできた。今年は、全校の約8割の生徒が参加し、活性化した。

### (2) 中学生友の会（中友）

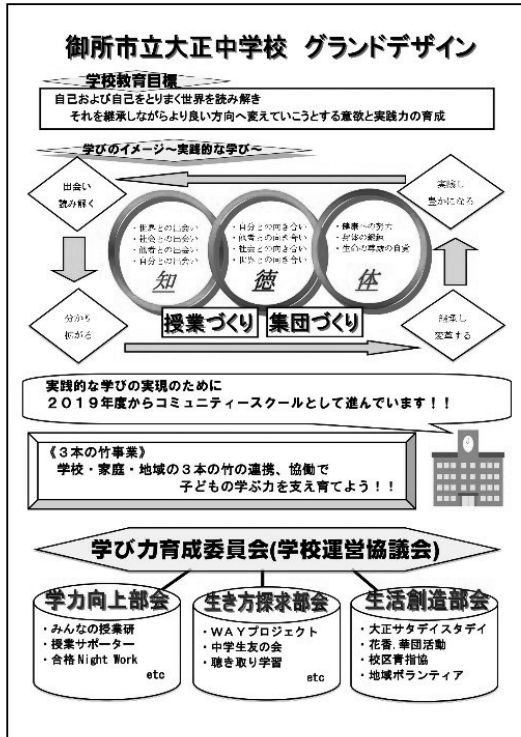


◆中友での定期テスト前学習の様子

地域にある施設（中央公民館等）を活用し、地域と学校が協働して、子どもたちのために学習活動を行ってきた。一人一人の子どもたちにきめ細かい手立てを行うことができ、学校でみせる様子とは違った、子どもたちのがんばりがみられた。今年は、地域の方が夜食としておにぎりやうどんを提供してくださり、子どもたちの意欲がさらに高まるとともに、地域の方と親しくなり、様々な方の支えがあることを実感するに至っている。



◆中友でのレクリエーションの様子

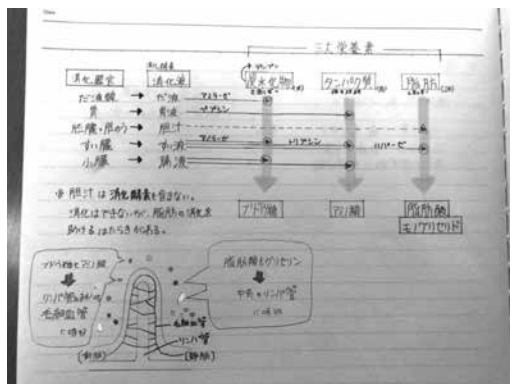


### (3) 大正中サタディスタディ (サタスタ)

本校教員が中心となり、地域の方の協力を得ながら、子どもたちの学習の機会を創出した取組となった。3年生を対象に、毎週土曜日、本校図書館に集まり、午前9時より学習を実施した。自主学習を原則としながらも、質問等がある場合は、積極的に質問できる。残念ながら今年は、感染症対策もあり、地域ボランティアの方の支援を制限させていただくことになったが、子どもたちは「行きたい」高校に向けて主体的に取り組む姿が見られた。



◆サタスタの様子



◆「このまとめ方どう?」とノートをみんなにシェアしてくれます





◆終了後、自分たちで消毒作業も行います（新型コロナウイルス感染症対策）

#### (4)「華団」による花香活動

地域のボランティアの方々と、環境美化委員会を中心とした生徒たちがコラボレーションしたボランティアチームが「華団」である。活動内容は、地域を花でいっぱいにしてという目的から出発し、地域が花の香りであふれるようにという意味をこめて「花香」活動という名前がつけられた。

今年度は、地域にある障がい者支援施設「あすなるの家共働作業所」のみなさんとともに活動することになった。

第1回目の活動は、プランターに土を入れ、朝顔やコスモスの種をまき、立て札を手作りした。生徒たちは、ボランティアで来てくださった方々にコツを教えてもらいながら一緒に活動を行った。「次は、何をしようか」「こっこのプランターもどんどん土入れていこう！」といった言葉とみんなのあたたかな笑顔が満ち溢れた時間を持つことができた。

さらに、自分たちで色とりどり作った立て札は、とても可愛らしく、種をまいたプランターに彩りが加えられた。花が咲いたときの立て札とのコラボレーションが楽しみだと、ボランティアに来てくださった方

も感心されていた。

「みんなが頑張ってくれたから、あっという間に作業が終わりましたね。けど、今日の作業で終わるのではなく、花は咲くまで世話していかなければいけません。ここにいるみんなで責任を持って育てていきましょう。」とボランティアの代表の方が声をかけてくださった。



◆花香活動の様子

第2回目の当日は、雨が降る中であつたが、大正校区青少年指導協議会のみなさん、あすなるの家共働作業所のみなさん、ボランティアスタッフの方々、そして本校生徒と大人数での活動となった。たくさんの方にご協力いただき活動することができた。

生徒たちは中間テスト終了後の活動であつたが、疲れを感じさせない動きで次々とプランターに土を入れていった。「苗は20cmぐらい間隔とって3つずつ植えようか」「手際良いねえ。家でもやるの?」と声をかけてもらい、生徒たちも「花がまだあるからもっとプランターを作ろう!」「この花の色の組み合わせ、センス良くない?」と楽しみながら作業している様子があつた。

大正校区青少年指導員協議会長さんから「今年はコロナウィルスの影響で祭りな

どいろいろな活動が中止になって、みなさんと関われる活動が減って残念ですが、このようにみんなと花を植えられる活動ができて嬉しいです。」という言葉があり、生徒とともに行う活動に前向きな評価をくださった。

### Ⅲ 成果と課題

大正の子どもたちの学び力向上のために「テストの点」という枠の中での奮闘から、「非認知能力」という視点への転換を図ってきた。そのなかで、道徳の教科化をチャンスととらえ、本校で長年大切にしてきた「人としての生き方・あり方」にこだわった教育活動に組み込んでいけるのかを追求してきた。まだまだ、道半ばであるが一定の方向性は確立できたのではないかと思われる。

また、「学校」という枠の中での奮闘から「地域とともに」という行動へ、枠を超えての取組を進めてきた。「三本の竹」事業の軸となるポジションに「学び力育成委員会」を位置づけたことで、各部会が活性化するとともに、地域の方が学校に関心を持ち、参画しやすい体制になりつつある。校長・教頭・各校務分掌代表・PTA会長・地域の教育関係者・大学教員で構成し、大正の子どもの学びに関わる現状や課題を「三本の竹」が共有し、その克服に向けた活動をマネジメントすることができている。本校の教育課題克服には、地域と歩む、地域から学ぶ「この道しかない」のである。

そして、その活動が評価され、2019年度「『地域学校協働活動』推進に係る文部科学大臣表彰」ならびに「優れた『地域と共にある学校づくり』奈良県教育委員会教育長賞」を受賞するに至った。本校教職員にとって、今後の取組に向かう大きな励みとなっている。

(教頭：泉 智博)

